

幼児教育における「遊び」を

小学校における学びにつなげる「スタートカリキュラム」

－ 郷土の音楽「物売り声」を教材とした授業づくり －

大阪市立開平小学校 椿本 恵子

目 次

1. 研究の目的
2. 研究の仮説と検証方法
 - (1) 研究の仮説
 - (2) 検証方法
3. 幼児教育における「遊び」を踏まえた「物売り声」の教材性
 - (1) 「郷土の音楽」の定義
 - (2) 「物売り声」の教材性
 - (3) 幼児教育を踏まえた単元構成
4. 検証授業の実際
 - (1) 単元の目標
 - (2) 単元の流れ
 - (3) 授業の実際
5. 研究のまとめ
 - (1) 結果
 - ①授業記録（VTR、ワークシート）より
 - ②アセスメントシート、学習後アンケートより
 - (2) 考察
 - ①成果
 - ②課題
 - (3) 今後の取り組みにむけて

参考文献

1. 研究の目的

新学習指導要領¹⁾(平成29年3月告示)において、子どもたちが身近な地域を含めた社会とのつながりの中で学ぶことの重要性がうたわれた。社会に開かれた教育課程を実現していくために、「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことが大切であるとされている。これは、小学校教育のみならず、幼児教育において大切にされている「遊び」を通した学びそのものであると考える。

大阪市教育振興基本計画(平成29年3月変更)²⁾において、就学前教育カリキュラムの在り方が述べられている。幼児教育が小学校以降の生活や学習につながることを配慮し就学前教育から小学校への円滑な接続が図られることが求められている。これは、近年うたわれている「スタートカリキュラム」の構築にもつながる視点である。

しかし、これまで本校における「スタートカリキュラム」のマネジメントは、生活科、体育科における取り組みにとどまり、教科領域を横断的に捉えるには至っていない。

そこで、幼児教育において大切にされている「遊び」を踏まえた「スタートカリキュラム」をデザインしていくことで、小学校における学びをより推し進めることにつながるのではないかと考えた。

よって、本研究は、「スタートカリキュラム」において、「遊び」を踏まえた教科領域横断的な授業づくりを行うことが、小学校における学びをより推し進めるものとなるかを明らかにすることを目的とする。

カリキュラムの編成にあたっては、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力(幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿)を踏まえた教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことができるよう

にすることや、教科の関連を積極的に図ることで、幼児期の教育との円滑な接続が図られるように工夫することが求められている。特に、入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきた資質・能力が小学校における学びにつなげることが大切であるとされている。

そこで、本研究では、幼児教育における「遊び」を小学校における学びにつなげることができる教材として、近年、教材化の重要性がうたわれてきている子どもたちの生活する地域に伝承されている伝統音楽(郷土の音楽)である「物売り声」を取り上げることとした。

新学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善として、音楽科では、郷土の音楽に親しみ、よさを一層味わうことができるようにすることで、音や音楽との自分との関わりを築いていけるよう生活や社会の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実が求められている。さらには、大阪市教育振興基本計画においても、基本となる考え方の一つとして「子どもたちが、我が国と郷土の伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた国と、自らが育ったこの大阪を愛し、大阪にふさわしい新しい文化の創造をめざすようになること」が挙げられている。

そこで、大阪に伝承されて来た「物売り声」を郷土の音楽と捉え、伝承されてきた文化的背景を感じながら、学びを推し進めることが重要であると考えた。幼児教育における「遊び」の視点を取り入れ、「物売り」の疑似体験としての「物売り遊び」の場を設定することで、自発的な活動としての遊びを通して育まれた資質・能力を、音楽科を中心とした教科領域の横断的な学びへとつなげることができるようにしたいと考えた。

2. 研究の仮説と検証方法

(1) 研究の仮説

幼児教育における「遊び」を小学校における学びにつなげるために、「物売り声」を教材とすることで、自発的な活動としての「遊び」を通して育まれた資質・能力を、音楽科を中心とした教科領域の横断的な学びへとつなげることができる。

(2) 検証方法

検証授業を実施し、授業における児童の言動（VTR 等）、ワークシート、アセスメントシートから、「遊び」における気付きを踏まえた学習活動の効果について検討する。

- ① 期間 平成 29 年 6 月～7 月
- ② 対象 大阪市立開平小学校第 1 学年 1 組
(男 16 名、女 9 名 計 25 名)
- ③ 検証授業教科・単元名
音楽科（音楽づくり）
「ことばのよくようをいしきして《ものうりごえ》をつくろう」

3. 幼児教育における「遊び」を踏まえた「物売り声」の教材性

(1) 「郷土の音楽」の定義

『日本音楽基本用語辞典』³⁾における「郷土芸能とは、人々の生業や信仰、習俗と深く結びつき、祭りや年中行事の中で、豊作祈願や悪霊退散などのために演じられてきた舞踊や音楽、演劇」という定義を踏まえ、本研究では、「郷土の音楽」を、「より身近なその伝統音楽の伝承されてきた環境（地域に生活する人々の営みや地域性）を包括的に捉え、音以外の表現媒体とのつながりをそのまま味わうことができる音楽」と定義する。子どもたちが自らの生活との繋がりを捉え、新たな価値観を形成していくことが大切であることから、本研究において、「地域」を「学習者自身が生活する地域」とする。

(2) 「物売り声」の教材性

「物売り声」とは、江戸時代、物売りが路上で移動しながら売り物を売り歩く際、売り物の名称を何度も繰り返す中でうまれたうたである。《わらびもち屋》や《やきいも屋》などの「物売り声」は、今も私たちの生活に根付いており、子どもたちにとっても生活の中で耳にする音楽の一つである。

本校の子どもたちが生活する船場はビルが立ち並ぶオフィス街だが、今も「石焼き芋屋」「わらびもち屋」が物売りにきており、「物売り声」を耳にする機会がある。「物売り声」は日本各地で伝承されており、その土地の方言の「言葉の抑揚」や「言葉の伸縮」、また、土地の地形や建物などによってうたい方は異なっている。大阪では大阪弁のイントネーションによってうたわれている。以下の表は、検証授業第 1 時間目における児童の生活経験調査である。

表 1 本校通学地域の「物売り」

| | 「物売り」を見た経験 | 購入経験 | 場所 |
|-----------|------------|------|--------------------------------------|
| わらびもち売り | 11 名 | 7 名 | 瓦町・備後町付近 南久宝寺町付近 中大江校区 |
| 豆腐売り | 8 名 | 6 名 | 瓦町・備後町付近 南久宝寺町付近 中大江校区 |
| 石焼き芋売り | 11 名 | 7 名 | 瓦町・備後町付近 南久宝寺町付近 中大江校区 堀江付近 |
| かき氷売り | 2 名 | 1 名 | 南久宝寺町付近 |
| アイスクリーム売り | 2 名 | 2 名 | 瓦町・備後町付近 南久宝寺町付近 |
| パン売り | 1 名 | 1 名 | 堺筋付近 |
| 紙芝居や | 9 名 | 7 名 | 大阪城公園、中之島公園 中大江公園、中央公園 南大江公園 |

子どもたちへのアンケートにより、本校の位置する地域には、さまざまな「物売り」が「物売り声」と共に、現代にも受け継がれてきていることが明らかになった。

このようなアンケート結果からも本教材は、子どもたちの生活経験を踏まえることのできる教材であると考えた。

（３）幼児教育を踏まえた単元構成

本単元では、「物売り声」の文化的背景を踏まえ、子どもたちの生活に基づくオリジナルの「物売り声」をつくり「物売り遊び」をする場を設定することで、子どもたちが自らの生活経験を再構成し、新たな価値観を生み出していく学びへとつなげることができるようにした。

本単元を構成する上で、以下の２点に留意した。

まず第１に、「遊び」における気付きを踏まえた単元構成である。本検証授業立案において、生活科「あさがおの栽培」における子どもたちの気付きを起点とした。あさがおの栽培において、色水遊びを行い、ジュースに見立てて「ごっこ遊び」を行っていた。これは、幼児期における「遊び」の経験が発揮された姿であった。

第２に、教科領域を横断した単元構成である。国語科の動物図鑑づくりにおける「図鑑をみんなにみせたい」と感じていた姿、図工科の粘土や色紙を用いた創作活動で「おいしいお弁当、みんなで食べたいな」「おへやをみんなでかざりたいな」と感じていた姿などを踏まえ、さまざまな教科領域における学びを、「物売りごっこ」に関連づけることで、新たな学習へと繋げていくことができるようにした。

４．検証授業の実際

（１）単元の目標

- 言葉の伸縮に関心をもって、意欲的にうたづくりをしている。（音楽への関心・意欲・態度）
- 言葉の伸縮を知覚・感受し、音楽表現の工夫をしている。（音楽表現の創意工夫）
- 言葉の伸縮を感じて表現ができる。（音楽表現の技能）

（２）単元の流れ

【第一次】「物売り遊び」をすることを通して、売り物のイメージが聴いている人に伝わるような「物売り声」をつくる。

【第二次】互いの表現を聴き合うことから、「物売り声」の特徴である「言葉の抑揚」の特質を捉える。言葉の抑揚の異なる二つの「物売り声」を聴き比べる比較聴取の場を設定することで、言葉の伸縮の違い（知覚）、そして、その違いによって生み出されるイメージの違い（感受）を交流する。

【第三次】掘んだ言葉の伸縮の特質を自らのイメージに合わせて工夫する。「物売り遊び」を通した表現の工夫を重ねる場を保障することで、文化的背景を感じながら表現する。

（３）授業の実際

【第一次】

①地域の《売り声》と出合う。（第１時）

教材との出会いの場において、船場における「わらびもち屋」と「石焼き芋屋」の《売り声》を提示した。子どもたちは、自然に模倣をはじめ、「本町のところで売っているのが、うちの近くにも売りにきていたよ。そのときに、このうた聞いたよ。」「きのう、マンションの下に売りに来たから買いに行ったよ。アイスクリームとわらびもちを買ったよ。」と、自らの生活経験に結び付ける発言がみられた。さらに、「自分たちもつくって物売りをしてみたい。」という「物売り遊び」への関心が高まったことから、売り物をつくり、「物売り声」をうたいながら「物売り遊び」をすることにした。

ここでは、物売りの「物売り声」を聴いて買い物をしたことがあるという生

活経験を踏まえ、自分たちもやってみたいという疑似体験としての「遊び」の場が、「学習活動の場」として、子どもたちによって構成されたとと言える。

②「物売り遊び」をしながら「物売り声」を創作する。(第1時、第2時)

「物売り声」づくりの場では、つくっては売り歩くという「物売り遊び」の場を設定することで、買い手としての相手を意識したうたづくりへと発展させることができるようにした。

「あさがおのジュースってぶどうジュースみたい。ジュースやさんになりたいな」「なかよしはん（縦割り活動）で育てた野菜を売ってみたいな」「国語の時間につくった《動物図鑑》を売ったら、もっとたくさんの人に読んでもらえるんじゃないかな。生活の時間に見つけたお花の図鑑もつくって図鑑やさんにしようよ」というように、自らの生活や学習における体験から売り物を考えていった。(表2)

表2 オリジナル「物売り」

| 物売り | 関連する教科領域 |
|--------|------------------------------|
| ジュース屋 | 生活科（色水づくり） |
| ほん屋 | 国語科(動物図鑑づくり) |
| あさがお屋 | 生活科(あさがおの栽培) |
| かたつむり屋 | 生活科（生き物） 図工科（絵画「パス」） |
| 野菜屋 | 特別活動 （縦割り活動における野菜栽培） |
| たこ焼き屋 | 図工科 （粘土「お弁当づくり」） |
| リボン屋 | 図工科（教室かざり） |
| とり屋 | 図工科 （工作「折り紙」） 生活科（生き物） |

活動において、「美味しいジュースって言ったら、みんな買ってくれるんじゃないかな」「たくさんの人に買ってもらえるように大きな声で物売り声を歌おうよ」と、「物売り遊び」における「物売り声」の必要感を感じながら、「物売り遊び」を楽しむ姿が見られた。(図1)



図1 物売り遊び

「物売り遊び」の中で、「物売り声」が自然に生まれ、何度もうたいながら、つくっていくことで、「もっと長くのばさないと、マンションの上まで聞こえないから、買いに来てくれないよ」「何度も大きな声で言って、売りたいものの名前を繰り返すと、買いに来てくれそう」といった発言が見られた。これは、「遊び」において、自分たちの生活の場（高層マンションが多い地域）の状況を想起しながら、「遊び」を楽しみ、その中で、「物売り声」の創作を進めていった姿であったと考える。

【第二次】

①「物売り声」の特徴である「言葉の抑揚」の特質を捉える。(第3時)

遊びの中で生まれた「よりたくさん売りたい」「みんなに美味しいものを届けたい」「どんな風にうたうのがいいのかな」という気持ちの高まりを踏まえ、互いの表現を聴き合うことから、「物売り声」を特徴付ける「言葉の抑揚」に着目する場(図2)を設定した。

T : 今から2つの「物売り声」を聴きます。どこが、違うかな？

【2つの「物売り声」を提示】

C : (言葉の抑揚がない「物売り声」を聴いて笑っている)

T : 何が違ったかな？

C1 : ①は、ロボットみたいだった。

T : ロボットみたい？

C1 : うん。なんか変。

C2 : ずっと一緒。

T : 何が一緒？

C3 : 声がずっと一緒。

T : うたに合わせて手を動かしてみて。

【もう一度、2つの「物売り声」を提示】

C : (①は、手をずっと同じ高さにしている。②は、手を上下に動かしている児童が多い)

T : なるほど。声の高さが上がったりと下がったりするのね。

C4 : ②の方が普通。

T : 普通？

C2 : うん。②は、本当に売りに来てるみたい。買いたくなる。

T : ①は違うの？

C2 : 偽物を売っているみたい。

C6 : ②は高いところまで聴こえそう。

図2 比較聴取場面における発言の様子

ここでは、より「言葉の抑揚」の違いを捉えることができるように「言葉の抑揚」があるものとないものを聴き比べた。

自らの体験を踏まえた比較聴取をすることで、「言葉の抑揚」の違いを、25名全員(100%)が知覚することができた。知覚の場面において、身体を用いた知覚の場(手による言葉の抑揚の知覚)を設定することで、「言葉の抑揚」に対する感受も促された。「(言葉の抑揚があると)

高いところまで聴こえそう」「(言葉の抑揚があると)何があるのか気になって買に行きたくなる」「(言葉の抑揚がある方が)おいしそう」と「買い手」としての立場で気持ちを想起したり、「遊んでいて楽しそう」と「売り手」の立場の気持ちを想起したりしていた。これは、「物売り遊び」を成立させる2つの立場を自らの「遊び」の経験で捉えていたことによる感受の深まりであると考えられる。(図3)

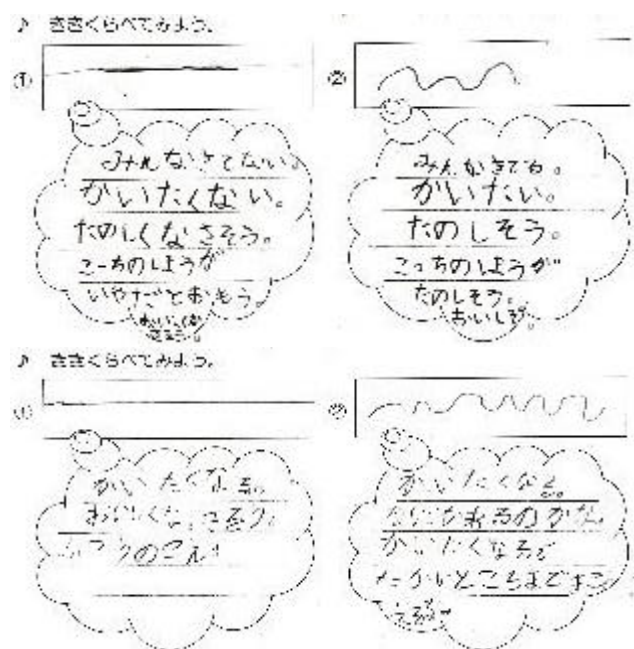


図3 比較聴取ワークシート

聴き比べることで、無意識であった「遊び」の中で用いていた「物売り声」の特質に気付いていったと言える。

よって比較聴取の場は、「遊び」「学び」に繋がった場である考える。

【第三次】

①言葉の抑揚を意識して、音楽表現の工夫をする。(第4時、第5時)

比較聴取の場を踏まえ、「もっと売れるようにうたいたいな」「うたができあがったら、また、物売り遊びをみんなでしようよ」という意見が出てきた。これは、「学び」を「遊び」に活かしたいと考えた姿であったと言える。

ここでは、比較聴取により表現の工夫のポイントが「言葉の抑揚」に焦点化され、グループで、どのように売りたいかを共有しながら、表現の工夫をしていくことができた。



図4 言葉の抑揚を意識した表現の工夫

C1 : (かたつ〜むり〜と書いている)
C2 : “かたつ〜むり、かたつ〜むり”
 じゃない？
C1 : (首を傾げている)
C2 : “かたつ〜むり、かたつ〜むり”
C1 : (C2に合わせて) “かたつ〜むり、かたつ〜むり”。あ、ほんまや。
C2 : “つ〜むり” ってするほうが、
 聴こえそうやん。
※「-」まっすぐのばす、「〜」声の高さを一度高くしてさげる、と言言葉の抑揚の違いを表記していた。

図5 創作場面における様子(かたつむり屋さん)

図4、図5の「かたつむり屋さん」のように、何度もうたい合いながら、言葉の抑揚の違いを捉え、自分たちのイメージする表現につくり変えていくことで、より「物売り遊び」を楽しみたいという姿がみられた。

すると、イメージに合わせた「物売り声」の工夫を考えたグループから自然と「物売り遊び」(図6)がはじまり、さ

らに、「遊び」の中でつくり変えていっていた。これは、子どもたちにとって「遊び」と「学び」が一体となることで、「学び」が推し進められた姿であったと考える。「物売り遊び」を通して、「物売り遊び」の特質を捉え、表現に活かしたり、友だちの表現の工夫を共有したりすることに繋がった。



図6 「物売り声」の特質を意識した「物売り遊び」

T : 今、みんなで遊んでみてどうでしたか？
C1 : ドキドキした。
T : どうして？
C1 : 覚えてうたえるか、みんなが買いに来てくれるかドキドキした。
T : なるほど。
C2 : はやく(売り物を)届けたくなった。
T : そっか。じゃあ、買いに行く時にもうたを聴いて、こんな風に思ったっていう人いる？こんな風なうただったから買いに行きたくなったって人いる？
C3 : 大きい声だったら行きたくなった。
C4 : “おいし〜よ〜” って言ってたから、おいしいのか買いに行きたくなった。

図7 最後の「物売り遊び」を終えた時の様子

最後の「物売り遊び」後には、「物売り声」の変化による「物売り遊び」の感想の交流（図7）を行った。

「“おいし～よ～” って言っていたから、おいしいのか（確かめに）買いに行きたくなった」「（早く）売り物をみんなに届けたくなった」というように、「物売り遊び」を成立させる「売り手」「買い手」両者の立場の気持ちを、自らの実感を通して交流していった。

このような交流の姿より、子どもたちは、「物売り遊び」を通して、「物売り」が伝承されてきた文化的背景を一体として味わうことで、「物売り声」の特質に対する「学び」をより深めていったと言える。

5. 研究のまとめ

（1）結果

①授業記録（VTR、ワークシート）より

第1に、自発的な「遊び」の場を保障することが、主体的な学びを生み出し、深い学びへとつながった。「物売り声」を聴いて、売りたいものを思い浮かべながら「物売り声」をつくりうただけでなく、「物売り声」が伝承されてきた文化的背景を一体として感じることができる「物売り遊び」を通した活動とすることで、子どもたちにとって、学びの必然性が生まれ、主体的な学びとなったと考える。本検証授業終了後においても、休み時間に「物売り遊び」を行う姿がみられた。そこでは、新たな「物売り」が生まれたり、さらには「物売り声」が即興的に生み出されたりしていた。これは、子たちにとって、「遊び」が「学習」で終わるのではなく、日々の生活に繋がったことによるものであると考える。

第2に、「物売り」をグループで行ったり、「物売り遊び」をしたりすること

で、「売り手」と「買い手」という相手意識を持った活動となった。さらに、表現の工夫をするために、自然に対話が生まれ、表現（学び）を深めていくことに繋がった。これは、生活科や国語科、図工科、さらには、生活経験における体験の共有がなされていたことが基盤となっていたために生まれたと考えられる。

②アセスメントシート、学習後アンケートより

検証授業終了後に、学習のアセスメントとして、本校で取り組んでいる「はぎ新聞」（図8）にふりかえりをまとめた。

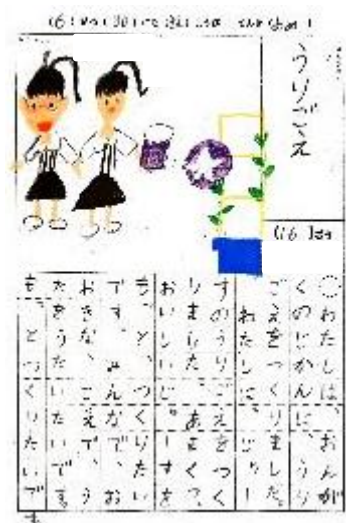


図8 アセスメントシート

アセスメントシートと学習後アンケートより、以下のことが明らかになった。

第1に、検証授業実施前に8名（32%）の児童が、生活の中で「物売り」や「物売り声」に気づいていなかったが、実施後には、8名のうち4名が、生活の中にある「物売り声」に気付いた。よって、84%の児童が自らの生活とのつながりを感じることができるよう学習となったと言える。4名のまだ生活の中でであうことのできていない児童も、「物売り屋さん」で物を買ってみたいという思いを抱いていた。このことにより、子どもたちにとって「物売り声」は生活と密着した郷土の文化であり、子どもたちの学

びを生活につなげることのできる教材であったといえる。

第2に、「物売り遊びは楽しかったか」という学習後アンケートにおいて、25名全員（100%）が「とても楽しかった」「楽しかった」と答えていた。2つの項目の選択の違いは、「物売り声を考えるのが、はじめ難しかった」という創作することを難しく感じたものであり、「遊び」や「学習」への抵抗感を感じているものではなかった。よって、「遊び」により「学び」への接続が円滑に行われたと考える。

（2）考察

①成果

「遊び」を通して育まれた資質・能力を教科領域横断的な学びにつなげることで、以下の2点が明らかになった。

第1に、幼児期における学びと小学校初期における学びの円滑な接続が容易になった。子どもたちにとって未分化な気付きを「遊び」として一体として取り上げながら、遊びの中における気付きを焦点化していくことで、「学び」へと繋げていくことができた。これは、「遊び」を踏まえた横断的な単元構成が、5領域で編成されている幼児教育から、8つの教科領域で編成される小学校低学年教育への円滑な接続の一視点となったと言える。

第2に、幼児教育でいう「協同性」の育成を踏まえた学びにつながったと言える。活動の「目的の共有」「実現しようとする過程の共有」が、「遊び」において、自然に行われ、学びをより深めることができる一視点となったと言える。互いの思いや考えを共有し、共通の目的の実現に向け、共に考えたり、意見交流したり、協力しあったりすることで、共に学び合い、「学び」への充実感を感じ

ることにつなげることができた。

②課題

本検証授業により、幼児教育における「遊び」の視点を「スタートカリキュラム」のマネジメントに取り入れることの有用性は明らかになったが、他4領域を意識をすることはしたが「スタートカリキュラム」のマネジメントにどのような視点をもって取り入れることが有用であるかを明らかにすることはできていない。より幼児教育を小学校教育に円滑に接続する「スタートカリキュラム」のマネジメントの視点を、全5領域を踏まえ整理することが必要である。

（3）今後の取り組みにむけて

本研究では、音楽科を中心とした教科領域横断的な「スタートカリキュラム」について知見を深めることができた。今後、他教科領域を中心としたアプローチについても実践研究を積み重ね、本校や本市の教育に役立てることができるようにしていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省(2017.3)「学習指導要領」
 - 2) 大阪市(2017.3)「大阪市教育振興基本計画」
 - 3) 音楽之友社(2007.4)「日本音楽基本用語辞典」
- 文部科学省(2017.3)「幼稚園教育要領」